

## 「福音に生きる」 マルコによる福音書7章1－13節

森島牧人 牧師

今日は、16世紀に起こった宗教改革の記念日礼拝です。カトリック教会では、神の御言葉・聖書をすべての国民が知り、その神の御言葉の中に正しく生きて行くことは難しいとして、生きて行くための基準を定め、それを伝統として大切に守りながら生きていました。人々によって守られていたその基準は昔からの言い伝えでしたが、それは、本来人々の生活の基準となるべきはずの神のみ旨からは、大きく外れるものとなっていたのです。そのような中で、生活の中心に置くべきは<神の言葉>であり、我々は「聖書に戻らなければならぬ」として立ち上がったのが、ドイツの聖職者マルティン・ルターでした。これが世に言われる「宗教改革」で、これを経て誕生したのが<プロテスタント教会>でした。

さて、今日の聖書の舞台はガリラヤですが、主イエス誕生の地であるガリラヤ地方は、当時のユダヤ教の宗教的リーダーからは「異邦の地」としての差別を受けていました。そのようなところへ、ファリサイ派の人々と律法学者たちがエルサレムからやって来て、主イエスのもとに集まって来たのです。彼らファリサイ派の人々や律法学者たちは、「イエスの弟子たちの中に汚れた手、つまり洗わない手で食事をする者がいるのを見た。ファリサイ派の人々をはじめユダヤ人は皆、昔の人の言い伝えを固く守って、念入りに手を洗ってからでないと食事をせず・・・」（マルコ7：2－4）と聖書は語り始めました。多くの規定によってユダヤの人々を教育して来たファリサイ派の人々や律法学者たちにとって、手を洗わない何人かの弟子たちの存在は、主イエスを詰問する格好の材料でした。

彼らは主イエスに、「なぜ、あなたの弟子たちは昔の人の言い伝えに従って歩まず、汚れた手で食事をするのですか。」（同7：5）と尋ねます。それに対して主イエスが言われたのは、「イザヤはあなたたちのような偽善者のことを見事に預言したものだ。彼はこう書いている。『この民は口先ではわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。人間の戒めを教えとしておしえ、むなしくわたしをあがめている。』あなたたちは神の掟を捨てて、人間の言い伝えを固く守っている。」（同7：6－8）というものでした。細かなことを言うことに熱心だが、最も大切な<神の言葉>を見失ってしまっていると指摘されたのです。

「汚れる」ということを忌み嫌うユダヤ教の人々にとって、汚れているとされていた取税人や罪人と共に食事をするなど考えられないことでした。さらに、レビ記にある食物規定を守り、汚れているされる豚肉などを食べることもありませんでした。しかし、主イエスは、そのような伝統的な規定を否定し、神の造られた食べ物はすべて食べて良いと言われ、さらに食物規定など守ることの出来ない取税人や罪人と共に食卓を囲み、交わりを持たれたのです。

その意図は、弟子たちに、神と共に生きる<福音の中に生きる>ということがどういうものであるかを伝えることでした。「神の言葉」である主イエスが説かれたのは、手を洗うことよりも、どう生きるかを聖書の言葉から、神の言葉から理解するということだったのです。

「福音」は、高尚な理論の中で成立されるべきものではなく、日常生活の中で証明されるべきものだからです。それは、具体的な生き方の中に、見えて来るものでなければなりません。日々の生活の中で、一人一人がそれを実践して行けるように、祈りつつ進んで行きたいと思えます。